第２節　景観の特性

（１）視覚的な特性

蘭島の棚田景観は、視覚的に３つの特性を持っている。第一は、蘭島が塊状で扇のようなユニークな形状であることである。塊状でまとまりのある棚田は、全体を認識することができ、その特徴的な形状は、蘭島のイメージを決定づけている。通常、棚田群の景観は、全体を俯瞰することが難しく、また俯瞰できたとしてもそれは地形のコンタ（等高線）をなぞるもので、わかりやすい形としてのまとまりを構成することはない。棚田が延々と折り重なる景観が一般的である。しかし、蘭島はユニークな全体像が認識でき、棚田の形から、それが蘭島の棚田であることが一目でわかる。蘭島は極めて特徴的な形状を持っている。

第二はその視点場が限定されていることである。蘭島は、周りを河川と崖で囲われ、すり鉢の底のような場所にある。棚田を見上げる視点は河川上にしかなく、他は見下ろしの景観となる。河川が蘭島を取り囲んでいるため、視点場は河川の対岸（三田集落側）におかれるほかなく、おのずと距離がとられる。また蘭島が斜面となっているため、この斜面を見やすい位置となるのも河川の対岸（三田集落側）である。さらに棚田を望むことのできる対岸の多くは現在、急斜面で樹木に覆われており、きわめて限定された場所でしか蘭島を望むことができない。すなわち、蘭島の景観は、視点場が固定され、一定の距離を持った「中景」である、ということである。

蘭島が比較的小さな塊状で、やや離れて見下ろす位置に視点場が限定されていることが、第三の特徴を導く。それは、蘭島の景観が、中山間の農村全体を俯瞰するような多様な背景をともなった棚田景観だ、ということである。視点場（三田展望所）からの眺望には蘭島の後背に、遠方の奥山、里山、人の生活する集落、前山、近代的な道路、うねる河川が入る。立体的でダイナミックな地形に、ある必然性を持って配置された農地や環境、工作物や建築物がのる。蘭島では、棚田を中央に据えつつ農村のあらゆる要素が同じ視野の中に含まれるという特徴的な景観が生み出されている。

上記のように、蘭島の景観は、棚田のまとまりが特徴的な形状をしていること、視点場が固定されていること、農村環境の多くの要素を背景に取り込んでいること、という３つの大きな景観的特性がある。

１）代表的な視点場とその特徴

蘭島を望む視点場は極めて限定的である。蘭島の全体を俯瞰するには、有田川の向かい側、三田集落から眺望する南向きの景観にほぼ限定されると言ってよい。

さらに三田集落でも蘭島を望むのは中谷に限定される。中谷の中では特に三田展望所、蔵王権現付近、愛宕神社の三カ所が視点場として取り上げられる。（なお、三田集落からの眺望には、必ず三田バイパスの橋梁が入るため、近代的な構造物をどう捉えるかによっては、必ずしも望ましい景観とは言えないとする立場もある。）

写真 5-1　三田展望所からの眺望

【 三田展望所の視点場 】

蘭島を望む視点場として最も好条件で重要なのが三田集落辻堂周辺の三田展望所である。こ

の視点場が重要な理由は、蘭島全体をもっとも近傍から望むことができる点、遠方にそびえる水ケ宝形山（1063m）が正面となる点、旧県道（高野街道、龍神街道）上にあり、往来しアクセスしやすい点、である。地形的に蘭島の真正面と言える場所である。なお、この三田展望所が蘭島を望む視点場になったのは、昭和 28 年の 7.18 水害時にこの視点場下部の樹木が崩落によってなくなり、視界が開けたことによる。それ以前までは、家屋や樹木が邪魔となってここから蘭島を望むことは出来なかった。その意味ではこの半世紀に開発された視点場だと言える。

【 蔵王権現社付近の視点場 】

中谷の最上部から望む景観である。三田集落の棚田の向こうに蘭島を望む景観で、最も遠方から蘭島を望む景観である。小峠、西原の集落も視界に納め、全体は望めないまでも、上湯水路の流路を知るには最も有効な視点場である。また、周囲の河岸段丘の地形を理解する上でも有効である。ただし、蘭島の下部は見ることができず、天上田と呼ばれる上部の棚田を中心に望むことになる。近隣民家の屋根越し（特に茅葺き屋根・西林邸の屋根越し）に蘭島を望む点が特徴である。三田集落の農村景観の近景、蘭島の棚田、西原集落、小峠集落の中景、水源や奥山の遠景の３つのレベルをかさねて見ることができる。

写真 5-2　蔵王権現社付近からの眺望

【 愛宕神社付近の視点場 】

現在は棚田跡に杉が植林されたために視界が閉ざされ、蘭島を望むことができないが、かつては三田集落で最も眺めのよい場所だとされ、催事が行われていた場所である。昭和 28 年に現在の三田展望所の眺望が開ける以前では、蘭島の景観はこの愛宕神社から望む景観が最も広く知られていたという。この場所からは、小峠、西原（蘭向を含む）の集落を一望することができ、また蘭島全体を見ることができる。蔵王権現の視点場と似ているが、蘭島全体を視界に納め、かつ西原集落、小峠集落もほぼすべてを望める点で重要な視点場であると考えられる。植林を適度に伐採することで、この視点場からの眺望を再び獲得することも可能である。この愛宕神社の北側には、上湯水路と同じく、笠松左太夫が建設した三田用水路が走り、その意味でも重要な視点場である。

２）その他の視点場

その他の視点場として、小峠集落からの眺めと、三田バイパスからの眺めをあげることができる。ただし、三田集落からの眺望に較べれば全体を俯瞰出来ず、そのダイナミックさは見劣りする。

【 小峠からの眺望 】

蘭島を横から望む景観である。昭和初期の蘭島の姿を伝える写真の多くは、小峠集落からの眺望である。三田集落にくらべ低い位置にあり、上から見下ろすというよりも、真横から望む景

写真 5-3　小峠からの眺望

写真 5-4　国道 480 号線三田バイパス橋梁からの眺望（左：三田集落　右：小峠集落）

観である。そのため石垣がよく観察出来、また各棚田の高さが揃えられている。小峠集落の建物が視界を遮るため、横に長い蘭島全体を俯瞰することは出来ず、部分的にしか蘭島を見ることができない。また、蘭島の背景は有田川沿いの崖地となり、コンクリート枠の法面処理を施した山留工事の跡が目につく。三田集落の景観はほとんど背景に入らず、また有田川の水面も見えない。全体を俯瞰するという点では不利であるが、三田からの眺望とは違った蘭島の姿を知ることができる。

【 国道 480 号線三田バイパス橋梁からの眺望 】

2006 年の三田バイパス共用以降に獲得された眺望である。小峠集落全体を俯瞰することができるが、蘭島はごく一部しか望むことができない。ただし、小峠よりも高度が高く、蘭島の背景に三田集落の茅葺き屋根民家（西林邸）や蔵王権現社などを配し、三田集落中谷を眺望するには良い視点場である。

【 蘭島からの眺望 】

蘭島は、すり鉢状の地形の真ん中にあり、眺望は開けておらず、山に囲まれているという閉鎖的な印象を与える。蘭島からの眺望は、有田川の水面、有田川護岸の斜面、および向山などの近傍の山の斜面、登賀峯などやや北方向の遠方の山の斜面がほとんどを占める。護岸斜面は部分的に山止めのり面工事がなされており、コンクリートで覆われている部分もある。蘭島からは三田集落、西原集落は全く見ることができず、小峠集落の一部、三田バイパス橋梁の一部、関西電力の堰堤の一部が見えるにとどまる。蘭島の棚田全体を見渡すことも出来ないが、畦や水路、牛小屋や石垣、ナルと呼ばれるハゼ掛けの木材など、棚田の近景を楽しむことができる。また、棚田に住む昆虫や植物を見ることも出来る。

写真 5-5　蘭島からの眺望（左：南からの眺望　右：北からの眺望）

（2）水系からみた蘭島の景観

蘭島の主たる土地利用は水田であり、灌漑が行われてはじめて成立する風景である。水との関わりから蘭島の景観の特性を記述する。

【「上湯溝」がもたらす人工的な景観 】

蘭島は自然に水が集まる地形ではない。この地に水が湛えられているのは自然とは異なる人工的な風景である。蘭島は、有田川を遡ること 3km、支流である湯川川から取水した「上湯溝」によって灌漑されている。つまり、景観上は棚田より下に流れているように見える河川がその棚田の水源だということになる。もちろん、下に流れている川から水を引くことは当然できない。そのため、その高度差を稼ぐために、3km 遡上して取水口を設けているのである。蘭島の棚田景観の妙は、水源である河川が棚田の直下を流れていることである。その落差が景観に現れていることである。水がない場所に水がある不思議さ、直下の河川が水源である不思議さ、それを可能とする灌漑水路の存在と、その壮大さを感じられる点が、水系から見た蘭島の景観の大きな特徴である。蘭島の棚田景観は、自然に流れる河川流路を変更し、水をコントロールすることで生み出された人工的な景観である。

【 氾濫の履歴と蘭島の景観 】

灌漑が水をコントロールすることだとすれば、氾濫は水をコントロールできない状態のことである。昭和 28 年（1953 年）の紀州大水害で蘭島の最も河川に近い下段の棚田が失われている。この場所は数十年の一度程度の洪水によって水没する氾濫原であるばかりでなく、棚田そのものが流失してしまう位置である。現在、ここに棚田は作られず、河原のままである。また、段丘下位側の棚田は水没したものの復元が出来た棚田であり、浸水、土砂堆積はあったものの土壌流失は少なかった場所である。また、2011 年 9 月の紀伊半島大水害では、1 枚の棚田が水没しているが、稲が水に浸かり倒れるという被害はあったものの、土壌が流失することは無かった。こうしてみると、蘭島の棚田の上限は頭首工（取水口）の標高と上湯溝の勾配によって決定されているが、下限は河川氾濫のリスクによって決定されているということが出来る。

【 水源と水源地の多様性 】

「上湯溝」の存在を知れば、蘭島の棚田の水源は、湯川川の集水域が蘭島の水源地であることがわかる。一方、三田集落の棚田は、蘭島のすぐ近傍にあるにも係わらず、後背の尖峰山を水源とする谷水を利用している。さらに小峠集落は宮川の河川水である。このように、有田川を隔てた対岸の棚田は、全く水源の異なる水を用いて耕作されている。同じ棚田に見えても、水系によって結ばれる水源域は異なっている。中山間地域の棚田は平野部の水田とは異なり、小規模で多様な水源が複雑に入組んだものとなっている。狭い地域、同じ棚田としてまとまりがあっても、多様な水源を用いており、異なる水源から成り立っていることがわかる。蘭島の棚田景観を見る場合には、その水源との関係を見ることが重要である。

写真 5-6　増水時の蘭島

【 水源の種類 】

蘭島周辺の棚田、集落への給水源には

３種類がある。

ひとつは河川水で、給水する場所より標高が高い位置まで河川をさかのぼり、そこに堰をもうけ頭首工より取水をして用水路によって配水するものである。河川水は広大な水源地を持ち、安定的な流量が確保出来る。雨量が少なくとも完全に河川が干上がることはない。安定した水源であるが、数キロもの距離をさかのぼって用水路を建設しなくてはらならず、隧道や水道橋などの土木技術を用いた用水路整備が必要である。近世江戸期、笠松左太夫によって用いられたのはこの方法で、それまでは村境のために不可能であった広域的な配水計画を、幕藩の集権制によって可能になったことが背景にある。

それ以前に用いられていたのは、谷川を直接棚田に引き入れるものである。蘭島周辺では三田集落の棚田がその水源によって開発されたものである。（ただし、江戸期以降は、笠松左太夫による三田用水路が整備され、河川水を用いた用水路と谷川とを混合することで水量確保している。）谷川は、天然の水路で、水源域は比較的狭く、水量が安定しないのが弱点である。一定の雨量があれば良いが、日照りが続くと谷川が完全に干上がることもあり、リスクの大きい水源である。一方、水路整備に要する労力は小さく、また水源と給水の両方が村内で完結するため、自律性が高い。

その他、農業用水ではなく生活用水として用いられるものとして、湧水（吹き水）がある。

写真 5-7　吹き水を利用した水溜め（西原蘭向地区）

（３）棚田景観の季節周期変動と営農サイクル

棚田景観は、営農によって周期的に、劇的に変化することに特徴がある。特に安定した期間と、数時間単位で景観が変化する移行期、さらに徐々に変化していく遷移期がある。景観の変化の周期と特徴を営農サイクルと関連させて記述する。

調査方法としては、定点インターバル撮影を行うことで、その変化を調べた。撮影は 2010 年 12 月末から開始し、2012 年末までの２年間の撮影行った。本報告書では 2011 年４月 16 日から翌年４月 15 日までの一年間を対照に分析を行っている。（注：カメラが４回停止した計 19 日間はデータが無い。よって、346 日分のデータを分析している。撮影間隔は、６時間間隔であるが分析には正午付近に撮影したもののみを抽出し、346 枚の写真を対象としている。）

１）現在の営農サイクルとその景観

【 湿田への移行期　４月末～５月中、３週間 】

冬の間、ほとんど変化のなかった棚田に転機が訪れるのは、４月 29 日、または 30 日、すなわちゴールデンウィークの初日である。この日にはじめて棚田が耕耘機で耕され（春の田起こし・代掻き）、終わった棚田から水が入れられる。水が入った棚田は、水盤が天空を反射し、晴れた日には青空を、曇った日には曇り空を映し出しはじめる。ゴールデン期間中におよそ 1/3 に棚田に水が張られ、その多くで田植えが行われる。この後２週間の間、田起こしと田植えが並行して行われる。つまり、ゴールデンウィークから３週間で、すべての棚田で田起こし、水入れが行われる。この３週間が水盤と稲株の棚田が混在する期間、稲株から水盤景観への移行の期間とな

る。この水盤景観の移行期は、棚田の土地所有状況が景観に現れる瞬間でもある。３週間の間に田起こし、水入れが行われるが、棚田の所有者ごとに行われる時期が異なり、棚田の状態の違いがそのまま所有者の違いに結びつくのである。蘭島の棚田は６名の農民によってまとまりのある形で所有されているが、それが現れるのが興味深い。なお、2011 年、2012 年では、蘭島で苗代づくりを行うことはなく、田起こし直後に田植えが行われる。そのため、播種、育苗の景観は蘭島では見ることは出来ない。なお、田植えの直前、４月第三日曜日には「上湯溝」の管理組合「田人」による溝さらえが行われている。この溝さらえを契機として、田植えが始動している。

写真 5-8　湿田への移行期

【 水盤景観期　５月中～６月上、２～３週間 】

2011 年では５月 18 日にすべての棚田に水が張られた状態となり、棚田は水盤が輝く風景へと変化した。水盤が空を反射する景観は、年間を通じてもっとも印象的な棚田景観である。すべての棚田が水盤となるこの景観は、およそ２～３週間つづく。６月 10 日頃までにすべての田植えが終わり、その後は徐々に水盤から緑の棚田へと変わっていく。

写真 5-9　水盤景観期

【 水盤から葉鞘の景観への遷移期　６月中～６月末、３週間 】

６月第２週には、田植えの早かった棚田はすでに天空の反射よりも稲の緑の方が上回り、水盤の景観から緑の稲の景観に推移し始める。もっとも田植えの遅い棚田が水盤から緑に変わるのが６月末頃で、水盤と緑の棚田がまだらとなった景観が３週間ほど続く。

【 葉鞘景観期、６月末～８月末、２ヶ月間 】

７月第１週には、草丈が十分な高さに達し、棚田は一面が緑の絨毯となり、しばらくは一様に稲の成長が続く。棚田全体が同様の景観となり、均一性の高い景観である。稲だけが成長し均一性が高く見えるのは、田草取りが行われているからである。この期間には土用干し（一定期間潅水を中止する）などの作業も行われるが、景観にはほとんど表れない。８月下旬に早い棚田から穂が垂れはじめるが、この時期に台風などの強風が吹くと稲が倒れ、統一感が失われる要因となる。なお、８月最終週に、蘭島の北岸の石垣と河原にて雑草の除去が行われる。

写真 5-10　水盤から葉鞘景観への移行期

写真 5-11　葉鞘景観期

写真 5-12　登熟景観期

【 登熟景観期、９月上、１週間 】

稲が緑色から黄金色へと変わり始めるのは９月第１週付近である。田植えの早い棚田から変化していくが、棚田の色合いがそれぞれ異なり、均一性の高い景観から、味わいのある景観へと移る。しかし変化は急激でその期間はわずか１週間程しかない。一部が色づき始めた直前、９月第二週に最初の稲刈りが行われ、景観は大きく変化する。景観上はわからないが、棚田は湿田から乾田へと変化している。

【 稲刈りとハゼ掛けの景観と、藁敷景観への移行、９月中～ 10 月上、３週間 】

稲刈りは主に棚田の下部から行われ、約２週間続く。稲を刈ったその日のうちにハゼ（ハザ）掛けが行われる。ハゼ掛けは、稲刈り直後にはじまり、同じ棚田で 1-2 週間程の間干されたのち、脱穀され解体される。稲刈りのタイミングはそれぞれの棚田で異なるため、すべての棚田で一様にハゼ掛けが行われることはない。2011 年では、54 枚の棚田のうち、17 枚の棚田でハゼ掛けを確認できた。特に９月下旬では、稲刈り前の棚田、ハゼ掛けの棚田、藁切りした棚田の３種が混在し、動きある景観が現れる。すべての棚田でハゼ掛けが終わるのは、10 月第二週である。ハゼ掛けが終わると、藁切りをし、棚田に藁を撒く作業が 10 月上旬頃から行われる。この作業で棚田の表面は藁茎の白い色に変わる。しかし、この景観が見られるのはわずかである。その理由のひとつは田起こしで、土壌と混ぜ合わされ表面が黒くなるからである。もうひとつは稲藁の腐敗で、特に雨が降ると腐敗が進み、褐色に変色する。藁切りが行われる時期に、畦に植えられている大豆も収穫される。なお、畦に彼岸花は少なく、中景観でその影響は殆どないと言ってよい。

写真 5-13　稲刈りハゼ掛けの景観、藁敷景観への移行

写真 5-14　稲株景観期

写真 5-15　稲刈り後の田起こし

【 稲株景観期、10 月下～４月下 】

乾田の景観が半年ほど続く。藁切り後、田起こしを行わず、稲株が残る棚田では、穭（ひづち／ひこばえの意）が伸び、棚田がわずかに緑がかった色になる。いわゆる「ひつじだ」の景観が見られる。一方、田起こしを行った棚田は土壌の黒っぽい色となっている。2011 年、2012 年調査時には両者は半々で、まとまりもなく、まだらの景観が見られる。この景観は安定的で春の田起こしまで持続する。降雪時を除けば、この景観は翌年の春まで全く変化せず、また耕作者もいないなど、極めて安定した景観である。ここではこの景観を稲株景観と呼んでいるが、蘭島では、一年の半分をこの「稲株景観」が占めている。しかし、この稲株の景観が重視されることは殆どなく、蘭島の写真として流通するものにこの稲株の景観はほとんど現れてこない。なお、積雪が認められるのは年間に４日であり、特に正午に蘭島が白く覆われたのは２日のみであった。積雪は、冬期の蘭島景観のなかで唯一、大きな景観の変化であるが、その頻度は少ないといえる。雪の積もった棚田景観は北陸地方ではよく見られるが、蘭島では大変珍しいものである。

写真 5-16　積雪時の蘭島

２）機械化される以前の営農サイクルとその景観

昭和 20 年代まで蘭島では米と麦の二毛作が行われており、田植え、稲刈りの時期が現在と大きく異なっている。５月６月は麦秋の景観となり、現在の水盤と緑の景観とは真逆の、黄金色の「豊穣」の景観であった。また一年を通して作物が植えられており、稲株景観は見られず、絶えず変化、遷移する景観であった。副業としてシュロ、コウゾの栽培も盛んで、有田川をつかった木材搬出も多く行われているなど、周辺の景観も動きが大きく、現在とは大きく異なっている。ヒアリングから、昭和 20 年頃の営農サイクルを採集している。

【 田起こし　５月～６月中 】

麦刈りが４月下旬から５月下旬にかけて行われる。麦刈りが終わった棚田から、田起こしが

始まる。まず「荒起こし」として、牛に犂（スキ）を引かせ、次に馬鍬（マグワ）を引かせてさらに細かく耕した。自宅の民家で飼われていた牛や、蘭島の牛小屋で飼われている牛が用いられた。棚田に牛がいる景観や、自宅から牛を引く景観は現在では見られないが当時はごく当たり前の景観であった。牛を用いるため、田起こし作業は主に男性が従事した。荒起こしが終わる頃、水が入れられ湿田となる。同時に畦の整備が始まり、畦の草を引く畦きり（アゼキリ）、畦に土を盛り補強する畦塗（アゼヌリ）が行われる。畦豆も植えられる。そして最後に代掻き（シロカキ）が行われ、田植えの準備が終わる。

写真 5-17　蘭島牛耕（昭和 40 年）　ふるさと清水より

【 田植え　６月中～７月中 】

６月中頃に田植えが行われる。田植えは共助、いわゆる手間替えの共同作業として行われた。同じ棚田をたくさんの人々（女性が多かったようである）で一度に田植えを終わらせた。にぎやかに行われていたと考えられる。

写真 5-18　蘭島 田植え時の写真（昭和 30 年代）

【 大休みと田草取り　７月下～９月下 】

田植えの後は「大休み」として、田仕事は一段落し、棚田から人気が少なくなる。棚田では 10 日おきごとに田草取りが行われる。これを一番草取り、二番草取り、と呼ぶ。二番草取りが行われる頃（７月上旬頃となる）、「虫送り」の行事が行われる。三田集落では昭和 10 年中頃まで行われた。

写真 5-19　蘭島 脱穀風景（昭和 33 年）ふるさと清水より

【 稲刈りと稲干し　10 月上～ 11 月上 】

湿田から乾田に切り替わる。稲刈りと稲干しは 10 月に行われていた。稲干しが終わると、その場で脱穀をおこない、唐箕（トウミ）を用いて穀物に混じったしいなや塵、籾殻を取り除いた。これらの作業までが蘭島で行われていた。籾摺りは家で行っていた。

【 畝かえと麦の播種　11 月上 】

稲干しが終わると同時に「畝かえ」が行われ、蘭島は水田というよりも畑としての景観に変わる。11 月中旬には麦が播種される。

【 麦踏みと岸焼き　２月 】

もっとも寒い時期に麦踏みが行われる。現在の蘭島では、稲のひこばえの緑が見えるが、当時は麦の緑が列状に並んでいた。３月に入ると麦が成長し、緑色の麦畑となっていた。また、麦踏みと並行して岸焼きが行われる。これは畦に生えた草を焼き払うことである。麦が育つ前でなけ

れば行うことができず、この季節に行われる。

【溝さらえ、ハガネうち　3月中～4月上】

上湯溝などの水路の補修を共同で行う。溝さらえ（水路の清掃）の後、水路の漏水を防止するためにハガネ土（赤土）を土採り山から人力で運び、水路の底を突き固める作業である。このハガネ土を産出する山は西原のフキの峠付近などにあり、共同管理（入会）されていた。40日ほどが必要だったという。これらは「田人」によって共同で行われ、地域の多くが係わるイベントであった。なお、現在はコンクリートの三面水路となりハガネ打は行われておらず、溝さらえのみが行われているが、ハガネ打の必要がないため、その時期が1月ほど遅くなっている。

【麦秋の景観と麦刈り　5月上～下】

5月に麦刈りが行われていたが、稲刈りの直前は麦秋の景観が見られた。周囲の山々に新緑が芽吹く中（山林の新緑は4月第4週頃から1ヶ月間である）、蘭島は黄金色に染まり、麦刈りと麦干しが行われていた。麦刈り、麦干しが終わった棚田から田起こしが行われた。

3）後背景観の周期的変動

ここでは営農以外の周期的な地域景観の変化を記す。対象とする景観は蘭島景観の背景となるもので、それらがどのように周期的変動を持っているかを記述する。なお、蘭島景観の背景として考えるため、ここでは遠景のみを対象とし、近景、中景は対象から外している。

【霧】

蘭島を望む風景には霧がかかることが多い。正午付近に撮影した写真にかぎっても、2011年に撮影した345日中48日（14%）に霧や雲が認められる。特に梅雨時に多いが、各季節それぞれ10日以上霧が発生しており、四季を通じて霧が発生している。霧が最も多く発生するのは6月の8回で、次いで、5月、7月、2月が月に6回であった。霧が少ないのは8月および3月で、月に1日の発生となっている。

【奥山（水ケ宝形山）の眺望】

三田展望所から望む蘭島景観の正面には、水ケ宝形山（1053m）が座り、景観上の重要な位置を占めている。この水ケ宝形山は、5キロメートル離れており、気象条件によって霞む場合が多い。霞は遠方の風景を霞ませ、近傍を強調するため、遠近感を感じやすく景観に奥行きが出ることが知られている。水ケ宝形山の全体が望めるのは、2011年に撮影した345日中200日（58%）、全く見えないのが76日で22%、一部が隠れているのが69日で20%となる。奥山全体を望めるのは、3月、4月で、隠れるのは7日のみであった。一方、10月は19日間、7月も17日間と、半分以上が隠れており、見えていない。次いで、6月（同16日間）、1月（同15日間）、2月（同14日間）と続いている。なお、10月は天気がよい日が多く、霧の出ない時期であるが、空気の透明度は低く、そのため奥山が見えないことが多いようである。なお、7月は降雨や霧の発生によって奥山が霞んでいる。3月、4月は霧も少なく、奥山もよく見える。

写真5-20　霧がかかった蘭島

【 山林の葉梢 】

後背の山林は針葉樹（主にスギ）の人工林が多く、部分的に照葉樹が主体の雑木林（アサキ山）が見られる。針葉樹は人工的な伐採や植林による景観変化の可能性があるものの、2012 年現在は人工林の伐採はわずかであり、変動の主たる要因にはなり得ていない。また伐採が少ないため、40 年生以上のスギがほとんどを占め、植林によって景観が異なることはなく、一様である。これらの人工林は針葉樹であるため、季節的な景観の変動はほとんどない。一方、雑木林は新緑から常緑、紅葉、落葉にいたる周期的な変動がある。ここでは、周期的に変化するものとして、雑木林景観の周期的変動について記す。

春に新緑が目立ち始めるのは田植えの直前の４月第４週である。そしてその後の１ヶ月間が新緑の風景である。６月に入ると新緑は常緑と変わらなくなり移行期は終わり、安定する。変化が訪れるのは、葉が色付き始める 11 月第２週で、第４週には全体が色付き、12 月第一週には紅葉のピークを迎える。紅葉の景観が強く意識されるのは３週間程度である。全体を通してみると、常緑が 85％、新緑となっているのは 31 日（９％）、紅葉しているのが 21 日（６％）となっている。新緑は田植えの背景として同時に進行し、春らしさのピークが重なるが、紅葉は稲刈りから２ヶ月後となり、「秋らしい」景観は、稲刈りと紅葉と２つのピークを持つことがわかる。

写真 5-21　紅葉の景観

【 河川景観の変動 】

河川増水による景観変化は、極めて降雨量の多い場合を除けば変動は小さく大きな影響はない。しかし多量の降雨時には、水位が急上昇し、川岸に繁茂した草が一掃され、流木で埋まるなど、一夜にして景観を劇的に変えることがある。2011 年９月の台風 12 号の増水では棚田の一部が冠水し、稲が倒れるなどの変化を及ぼした。特に水が濁り、河川敷の草木がなくなり、土砂や流木が堆積した様子は大変な変化であり、河川増水が景観に与える影響は無視できない。ただし、有田川の流量は、降雨時あるいは降雨直後は増水するが、通常時の流量は季節による変化は少な

写真 5-22　台風 12 号増水後の蘭島

写真 5-23　台風 12 号増水後の湯子川地区

く、これらの変化は周期的変動というよりは確率的に引き起こされる偶発的な変動と捉えるべきであろう。なお、水害で浸水する場所に水田や人家が無いなど水害と景観とは非常に関係が深い。増水した景観は蘭島の景観を損なうというよりもむしろ、蘭島の地域景観の一側面である。

なお、1950 年以前には、紙漉がひろく行われており、河川敷ではコウゾを水にさらし、皮を剥ぐ作業が行われていたというが、現在は見られない。鮎漁が開放される期間には有田川には釣り人の姿も見られるが、蘭島周辺では確認できていない。

【 集落住居など 】

住居集落景観の周期的な変動は観察されなかった。1950 年代頃までであれば、茅屋根・杉皮葺き屋根の吹き替えや、紙の乾燥、建具の開閉や張り替え、畳干し、また煮炊き時に立ちのぼる煙などの特徴があったと推測されるが、2011 年現在、集落景観に周期的な変化は確認できない。なお、小峠集落の有田川河岸の畑地や草地の草刈りが行われているが 2011 年はなく、2012 年 1 月と 9 月に行われており、調査期間内では周期性は確認できなかった。また、ビニールハウス、農作業小屋などにも周期的変化は見られなかった。2012 年時点では、集落、住居、農作業小屋など建物には周期的変化は見当たらなかった。

（4）社会と景観

ここでは、蘭島の現在の棚田景観に、社会関係がどのように立ち現れているのか、景観と社会との関係を分析する。

【 土地所有と景観 】

2012 年現在、蘭島の土地は 7 名の土地所有者がいる。ヒアリングによると、1948 年頃は 9 名によって土地が所有されていたという。土地所有は農地改革を経ても大きく分散はしていない。所有者ごとに所有面積の偏差はあり、2000㎡未満から 1 万㎡を超える所有者まで、7 倍の違いがある。最も広い面積を占める所有者は蘭島の 46％の棚田を所有している。2 位から 7 位となるその他 5 名の所有者は、1450㎡から 3500㎡の間にあり、7 ％から 16％を占める。この 5 名の所有者にはそれほど大きな偏差はないと言えよう。まとめると、蘭島の棚田は、約半分が 1 名に、他は 5 名の所有者で分割されているといえるだろう。

つぎに、所有された棚田が分散されているのかどうかを見ていく。蘭島の農地は棚田数枚が集まった 19筆に別れている。土地所有は所有者によってまとまっている訳ではなく、9 筆をもつ所有者の棚田も、2 筆、3 筆の所有者の棚田も分散しており、まとまりは強くはない。田植えや稲刈りでは、土地所有者が日程を決めるため、景観は土地所有に大きく左右される。しかしその場合、離れた場所にある、同一の所有者の棚田は、時間的には同期しているものの、景観的にまとまりをもたらすことはなく、見かけ上は 10名以上の所有者がいるように感じられる景観となる。

【 集落のまとまりと景観 】

村境では蘭島は西原集落に含まれ、水路や土地所有からみても西原集落の一部である。視点場が三田集落にあり、西原集落から蘭島を望むことができないため、景観的にはわかりにくいが、社会的に蘭島は西原集落に属する。蘭島と西原集落を強く結びつけているのは、上湯水路である。上湯水路の流路を知れば、西原集落との結びつきは明白であるが、水路は中景、遠景では認知しにくく、上湯水路の存在を知っていなければ、蘭島を西原集落と結びつけるのは難しい。一方、土地所有者は西原に限らず小峠集落のものも居る。1953 年の水害で流失してしまったが、かつては蘭島と小峠集落との間に橋が架かっており、小峠との結びつきは景観にも表れていた。

（５）景観特性のまとめ

蘭島の景観の特性は、独特の地形から生じているもの、河川や水路から生じているもの、そして営農や土地所有などの社会活動から生じているものがある。地形からは、視点場が固定的で棚田全体のユニークな形状を認識しており、農山村の生活環境をその背景にもつという景観特性が生じている。河川や水路からは、棚田の形が規定されていることがわかり、蘭島の形を眺めることで、用水路や水源地、河川氾濫に思いを巡らすことができる点が特性である。営農や土地所有からは、景観が季節に合わせて周期変化し、時に土地所有形態や農業技術をその景観に表出させていることが大きな特性である。一面の水盤や黄金の稲穂など、ドラマティックかつ変化にとんだ景観を生じさせている。

蘭島の景観の特性のひとつひとつは、中山間地域の棚田で一般的に見られることと大きな違いはなく、特別に広大なものでも、壮麗なものでもない。しかしながら、小規模で景観的なまとまりがあり、非常にわかりやすい形で農村環境の総体を一望出来る点が、蘭島景観の大きな特性である。